

月刊

昭和52年10月5日第1号刊行 ISSN0386-2283
平成20年10月1日発行 第32巻第10号通巻第373号

国立民族学博物館

2008

10

特集

インド映画



活字戦線異常あり

有川 浩

ありかわ ひろ／高知県生まれ。作家。「塩の街」で第10回電撃小説大賞＜大賞＞を受賞し作家デビュー。累計110万部突破の『図書館戦争』シリーズはコミカライズの他、プロダクションI.G制作のアニメDVDが好評発売中。また、阪急今津線を舞台にした短編連作集『阪急電車』（幻冬舎）もwebコミック『MAGNA』でコミカライズ連載中。

小説(以下「活字」と総称します)をエンターテインメントとしてとらえた場合。

現在、その地位は非常な危機に瀕しています。これはお手元に情報雑誌のひとつもあればすぐ実感して頂けます。エンタメ紹介コーナーで、活字本の定位置は大抵最後のページです。これが活字に対する世間の評価を如実にあらわしています。

ぶつちやけまして、もつ活字のライバルは活字じゃないんです。映画でありテレビであり漫画でありレジャーでありコスメであり(以下略)、およそ「娯楽」となり得る全てのものが活字のライバルです。現在、お財布のなかに「書籍費」を取りわけて下さるお客様は絶減危懼種に認定されてもいい。ウィトンのお財布八万円なら買ってくれる人が単行本一冊一六〇〇円を高いと仰る。これが活字の現状です。これ、ただだけ絶望的な戦況がおわかり頂けますでしょうか。——まともによつて勝てるわけねーだろーこんなんもん！

活字はもうこれまでの伝統を守つてただけじゃ勝てないんです。伝統として残るべきところは残るべきでしょうが、しかし奇襲を選ぶ活字があつてもそれは容認されていいのではないかと(容認されるとわたしのような日本語の汚い物書きも生きやすくなつて助かります)。

例えばケータイ小説。これを頭ごなしにバカにする

人は、どんなにその方が活字を愛しているとしても「活字の潜在敵」と言つて過言ではない。もしかしたらケータイ小説を入り口に「活字」の世界にもお出で下さる方がいるかもしれないのに、その可能性を根こそぎ刈つてしまつからです。だつて自分の好きなものばかりにした奴の「オススメ」に手を出さうつて人がいますか？ いるわきゃねえ。「活字つてお高く止まつて感じ悪い」つて思いますわな、フツに。

活字は既になら上から目線でモノ言えるほど立場の強いエンタメ媒体じゃありません。しかし活字業界の体質は中々変わるうとしません。

例えば一般文芸の世界では「短編集は売れない」と判で押したように言われます。しかし「活字層」を広げていくなら、これからはむしろ短編集でしょう。活字になじみがない方でも気軽に手に取りやすいのは短編集、あるいは連作短編集です。短編集が売れない、とは従来の傾向しか見ていない発言です。出版界の体力があるうちに重厚な長編も押さえつつ短編集にも力を入れ、間口を広く取るのが長期的戦略と言えましょう。

お客様の開拓を放棄した業界は衰退します。限定されたパイを奪い合うより、パイそのものを広げる戦略のほうが建設的だと思つてですが——取り敢えず、「こうあるべき」な校則だらけの学校はつまらないよね、つてなところをひとつ眩いてみるとします。



目次

OCTOBER 2008 10
月刊まんがはく

01 エッセイ 世界へ世界から
活字戦線異常あり
有川 浩

02 特集 **インド映画**

ことばの壁を超える

杉本 良男

英国の南アジア系映画

池島 彩

ハリウッドを誘う「インド洋の貴婦人」

—モーリシャスとインド映画

杉本 望子

08 モノ・グラフ
陶磁器に刻印されたまなざしの交錯
—特別展「アジアとヨーロッパの肖像」から
吉田 薫司

10 地球ミュージアム紀行
神奈川県立近代美術館葉山館の
5年間を振り返つて—展覧会業務の外で
棚山 昌夫

11 表紙モノ語り
ラバーリーの花婿用袋
上羽 陽子

12 みんなくインフォメーション

14 万国津々浦々
サイクロンから見たミャンマー
田村 克己

15 時論・新論・理想論
刺繍布に込められた思い
中谷 純江

16 外国人として生きる
「宝くじにあたったのはどっち？」
庄司 博史

18 歳時世相篇
⑦ハリ・ラヤ
オラン・アスリの祝祭日
信田 敏宏

20 生きもの博物誌
博物館のいたずら虫たち④
河村 友佳子

22 フィールドで考える
更紗産地が移転した本当の理由
金谷 美和

24 みんなく ウィークエンド・サロン
研究者と話そう
次号予告・編集後記



インド映画

特集

英国の南アジア系映画

池亀 彩
(いけがめ あや)

エジンバラ大学社会政治学研究所研究員

ことばの壁を 超える

杉本 良男
(すぎもと よしお)

本館民族社会研究部

一九九八年の「ムトゥ」踊るマハラジャ (Muthu, 1995) のヒットとともに日本でもインド映画が注目を浴びてから一〇年がすぎた。そして二〇〇八年は日印映画交流年にあたっている。インド映画ブームはあつというまにじほんでしまったが、二〇〇〇年代に入るとインドはとくにその経済発展が世界の注目を集め、日本でも株式投資やインド式計算法がひそかなブームとなっている。この間インド映画をとりまく状況は大きく変貌したが、映画は相変わらずインドの娯楽の王道である。そしてその波はさまざまなかたちで外国におよんでいる。

インド映画の本格的な海外への進出は、独立後の一九五〇年代からのことである。いわゆるネルー型社会主義の理想に共鳴した社会派娯楽映画のチャンピオン、ラ

ーシ・カプールが監督・主演した「放浪者 (Awaraz, 1967)」などが当時のソ連に輸出され、「おいらは放浪者 (Awaraz Hoon)」のようなヒンディー語の挿入歌も大ヒットした。現在でも、ロシアだけでなくウズベキスタン、クルグズスタンなどでもロシア映画と人気を二分している。

欠点が魅力に

インド映画の世界への広がりには、ことばの問題があるので、まずはインド人が多く暮らしている地域に偏っている。海外在住のインド系の人びとは数千万にたつし、近隣のネパール、スリランカからイギリス、アメリカ、カナダ、湾岸諸国、シンガポール、マレーシアなどへと広がって、映画も合法非合法の手段を問わず、広く受け入れられている。

しかし、インド映画の真の不思議は、ことばのわからない地域でもかなり受け入れられているところにある。たとえば、かつてインド人移民が多かった東アフリ

南アジア系移民

英国の南アジア系移民をテーマにした映画は、一九九〇年代によくあらわれる。それらは彼らの出身国の伝統的価値観と英国的価値観の衝突、世代間の衝突、多文化主義国家のなかでの自己表象などをテーマにしたものが多い。

初期の傑作「East is East」(1996) は、一九七〇年代初頭の北イングランドに暮らすパキスタン系一家を描いたもので、伝統的な結婚を望む父親とそれに反発する子どもたちとの葛藤をコミカルに描いた作品である。伝統的価値を主張する親世代と、それを拒絶する二世世代との対立は、南アジア系英国人にとってはすでに「笑い」として受け入れられるほど客体化されているが、もちろん衝突がなくなった訳ではない。

日本でも公開された「ベツカム」に恋して (Bandi Like Beckham, 2002) は、ロンドン西部に住むシク教徒の女の子が親の反対を乗り越えてサッカーを続け、白人の恋人までつくってしまうストーリーだ。東アフリカ出身のインド系英国人であるG・チャータ監督は屈託なく多文化主義を強調するが、逆にその皮相さも露呈しているように思われる。二〇〇七年の「Brick Lane」は、バン格拉デシュの村から一七歳で英国に移り、二〇年間東ロンドンのブリック通りで暮らす女性が徐々に自分自身を発見していく物語で

力だけでなく、ほとんどインド人のいない西アフリカやインドネシアなどでも受け入れられている。さらに衛星放送の普及がそれに拍車をかけている。インド映画の歌って踊っての徹底した娯楽性と、定型化したストーリーが、ことばの壁を超える原動力になっている。皮肉なことにはそれはインド映画をさげすむときの常套句である。

Bollywood映画のDVDも簡単に手に入る。ロンドン



ある。愛がないと思っていた結婚に、より深い絆を発見し、長く想い続けた故郷の村に決別し、「ここ(英国)が私の故郷(ホーム)」だと言えるまでの軌跡は、移民の生活をリアルに伝えることに成功している。しかし、この映画の元となったM・アリの原作が、無教養で貧しい移民という誤ったイメージを流布したとしてバン格拉デシュ・コミュニティから強い反発を受けたことも事実である。

ボリウッド映画市場

一方、インド国外におけるボリウッド

映画(インド映画産業の中心地ムンバイの旧称ボンベイ)とハリウッドを組み合わせた造語のDVD等の売り上げがインド国内での映画興行収入を上回るようになって久しいが、英国人もこの傾向に大いに貢献している。最近のボリウッド大作はほぼ同時に英国でも公開され、興行成績で上位一〇位内につけるほどである。むしろ海外で優雅に暮らすインド人が頻りに登場する最近のボリウッド映画(例えば「家族の四季」愛すれど遠く離れて (Kabhi Khushi Kabhie Ghan, 2001))の方が、南アジア系英国人の自意識を満足させるのかもしれない。



ロンドン南部郊外の南アジア系住民の多い地域

ボリウッド・スターは英国でも大人気



二三〇万人といわれる南アジア系英国人は、現在英国の総人口の約四パーセントを占め、非ヨーロッパ系英国人のなかで最大のコミュニティを形成している。彼らの多くは、第二次世界大戦後にも工場労働者として移住してきたパキスタン系およびバン格拉デシュ系移民、一九五〇年代から一九六〇年代に医療従事者として雇われたインド系移民である。また東アフリカ諸国で、経済・産業を掌握していたインド系住民が一九六〇年代から一九七〇年代の民族主義運動の高まりで、国外退去を余儀なくされた際に、英国へ難民として移住してきた人びとも多い。さまざまな過程を経て英国へ渡ってきた南アジアの人びとだが、すでに二世、三世が英国人として生活している。

ハリウッドを誘う 「インド洋の貴婦人」 —モーリシャスとインド映画

杉本 星子
(すぎもと せいこ)

京都文教大学教授

インド・モーリシャス

そのむかし、インド洋の大海原を帆船が行きかっていた時代、奴隷にかわる労働力として、インドから数多くの契約労働者が世界各地のプランテーションへ船出していった。そのひとつが、「インド洋の貴婦人」と謳われたモーリシャスの砂糖プランテーションであった。モーリシャスの主要生産物は、今も砂糖である。

インド・モーリシャスと総称されるインド系住民は、二〇〇七年現在、人口の六八・八パーセント(約八三万五〇〇〇人)を占める。そのうち約半数は、ボージュブリーを母語とするビハール出身の労働者の子孫であり、残りは、アーンドラ・プ

ラデーシユ、タミルナードウ、グジャラート、マハーラーシュトラからきた移民の子孫といわれている。

ロケ地として売り込む

MBC (Mauritius Broadcasting Corporation) チャンネル2で放映されるインド映画や音楽番組、ヒンディー語(英語字幕つき)連続テレビドラマは、こうしたインド系住民に限らず国民に幅広い人気がある。モーリシャスはインド映画の海外市場として、アメリカ・カナダ、イギリスにつき、ドバイと並ぶ輸入国であり、インド映画の販路をセーシェルや南アフリカへ広げる窓口ともなっている。モーリシャスを舞台にした映画(Dino Dutt Kayayi) (2005)は、アマターブ・バッチヤーン演ずるヒンドゥー教徒の労働者の息子とローマン・カトリックのフランス系大資本家の娘の恋愛と家族の葛藤を描いた物語である。

一九九一年のインドの経済開放以来、モーリシャス政府はインドとの経済関係を強化し、インド・フェアやファッショ・ショー、映画祭などをとおして経済・文化交流をおこなってきた。モーリシャス映画協会はモーリシャスを映画のロケ地として使ってもらうために、観光局やモ

インド映画と中国 —1980年代 初期のブーム

潘 宏立
(ばん ほんり)

京都文教大学教授

一九八六年、当時イギリスの植民地であったインドと清朝末期の中国に、映画がはじめて持ち込まれ上映された。その後、両国の映画はそれぞれ異なる発展の軌跡をたどった。

中国では、中華人民共和国の成立後、政治的な制限を受け、一部の社会主義国家の作品をのぞき外国映画の上映が禁止されるなど、一九八〇年代の「改革開放」時代までその発展は停滞するようになった。

一方、インドは一九五〇年代から映画の「黄金期」に入り、現在では、年間の制作本数や観客総数が世界でもっとも多い映画大国となっている。年間の制

作本数はアメリカ・ハリウッドを上回り、ムンバイにある映画制作の中心地「ハリウッド」の名は、ハリウッドと同様、世界じゅうで知られるようになった。中国で「ハリウッド」は漢字の「宝莱坞」(ハリウッド)に比べると、よりロマンチックな雰囲気漂っている。

個性豊かでわかりやすいインド映画は、巨大な隣国である中国の人びとに強いイメージを与えることになった。とくに、「改革開放」政策を実施し、外国の文化にも少しずつ門戸開放しはじめた一九八〇年代ごろの中国に、強いインパクトを与えた。現在では中年以上になつていく世代の中国人なら誰も、その影響を受け、印象が深く残っている。

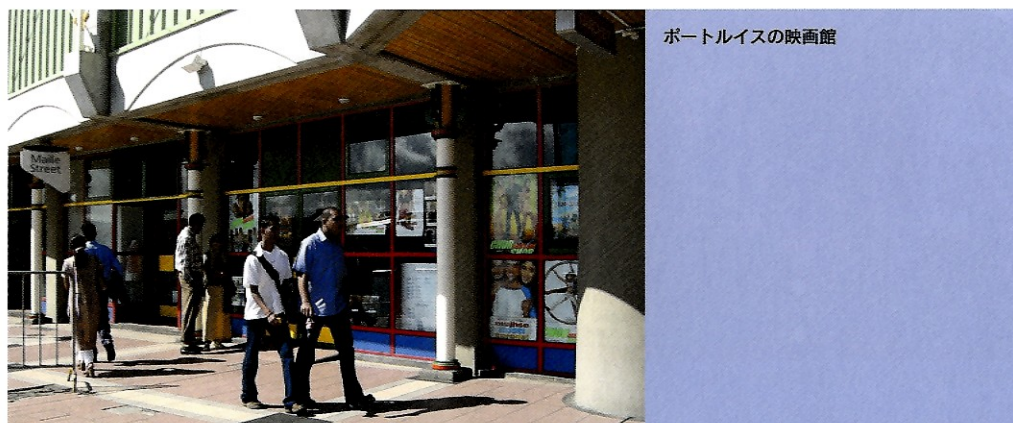
わたしは、一九八〇年代中ごろまでの学生時代を中国で過ごした。大学や大学院在籍中、学内の映画館でインド映画を鑑賞したとき、周囲の観客が、そのわかりやすいストーリーとともに、豪華な民族衣装を纏った出演者たちによるミュージカルシーンに魅了されていたことをよく覚えている。

デイスコ・ブーム

当時、「大蓬車(Caravan, 1971)」「流浪者(放浪者, Awaraz, 1955)」「奴里

ーリシャス航空とタイアップし、撮影のサポートやエキストラの手配、クルーとその家族の滞在費のデイスカウントといった特典を用意して積極的に売り込

ポートルイスの映画館



んでいる。青い海と白いビーチというエキゾチックな美貌の「インド洋の貴婦人」が微笑んで、ハリウッドの旅心を誘っているというわけである。



映画のポスター(ポートルイス)

(Noorie, 1979)、「両敵地(2エーカーの土地, Do Bigha Zamin, 1953)」などのインド映画がたびたび上映され、人気を集めた。これらの作品は中国人にとって、インド映画の代表作になった。劇中の踊りや歌も中国の大地で急速に流行するようになった。例えば、「アラバグ、ア：アラバグ、ア：」という「流浪者」のなかの歌は、学校や街のあちらこちらで流れていた。当時、憧れの電化製品だった日本製テープレコーダをいち早く手に入れることができた数少ない大学生や、街の「万元戸(成金)」の個人経営者は、インド映画の主題曲をわざわざ大音量で流し、周囲の人びとから羨望のまなざしを集め、流行の先端を走っているという自己満足に浸ることがよくあった。

一九八五年、インド映画「迪斯科舞星(Disco Dancer, 1982)」が中国で上映されるやいなや、中国にデイスコ・ブームが到来した。映画の主題曲(Jimmy Adjal)をはじめ、「Am a Disco Dancer」、「Yaad Aa Raha Hai」などのデイスコ曲は、もともと人気が高く、その激しいリズムが、「改革開放」の時代に入った当時の中国の人びとの高揚した心情と共鳴したと言える。そのときから、デイスコは、あらたな流行文化のひとつの象徴として都会から伝統的な暮らしが残る

農村まで急速に広がっていった。デイスコのダンスホール(迪斯科舞厅)は、ラツパズボンとサンングラスといった服装の若者でいつも溢れる場所になった。その後の約二〇年間、アメリカや日本など「先進国」の映画が、中国で多く上映され、爆発的な人気をえるようになるとともに、中国映画の質と量も急速に向上してきた。

それに対して、インド映画はストーリーが古臭く、表現手法が単純で変化に乏しいと受け取られるようになり、人気急速に低下していった。とはいえ、審美観の多様化が進んでいる中国では、インド映画ファンもいまだ少なくない。そのため、「雅恒影視」という中国の映像会社は二〇〇三年だけで約二〇〇本のインド映画を輸入し、DVD製品にして市場に出した。中国のテレビ局も「宝莱坞生死恋(Devdas, 2002)」と「阿育王(アシヨカ大王, Asoka, 2001)」を放映し、好評をえた。

インド映画は今もその豊かでわかりやすい個性で中国人の心に刻まれているのだ。

特集 インド映画

天山から愛を込めて

吉田 世津子
(よしだ せつこ)

四国学院大学准教授

少々古い話である。一九八六年、中国・新疆ウイグル自治区西端の都市カシュガルを旅行中、地元食堂へ昼食に入った。料理を注文して待つあいだ、ラジオがカセットか、食堂に流れていた音楽のフレーズがふと耳についた。英語の歌なのに妙にゆるく、そのわりにノリはよく、発音がはっきり聞き取れる。たった一度聞いただけに記憶に残るその歌を、一〇年後、旧ソ連・クルグズスタン(キルギス)の天山山中にある村で再び偶然耳にした。長期滞在しての調査中、ホームステイ先の一家と夜遅くにテレビを観ていたときである。ようやく何の歌かわかった。「Am a Disco Dancer」、インド映画に流れる音楽だった。

中央アジアの山岳国・クルグズスタンで一九九四年からフィールドワークを続けているが、じつはわたしは現地の映画事情にあまり詳しくない。だがテレビ番組は、フィールドでみんなと一緒に観ているのでよく知っている。特に長期滞在した一九九五、九七年、村での娯楽といえばテレビの連続ドラマか映画番組だった。アメリカ、ロシア、香港、さまざまな



首都ビシケクにあるアラト一映画館(2008年)

国の映画を観たが、ハデな衣装に歌と踊り、シンプルといえはシンプルな勧善懲悪の筋書きで、インド映画は他の追従を許さない。夜中近く、電気を消した暗い部屋のなかで光を放つインド映画は、緑と茶が基本色の天山山中に極彩色の南国を映し出していた。

一九九五、九七年といえは、クルグズスタンは、ソ連崩壊・独立に伴う政治経済体制の転換のまっただなかにあつた。ソ連時代の常識はすべてひっくり返り、これから自分たちは一体どうなるのか、方向感覚の喪失にみな深刻な不安を募らせていた。一九九八年、「クルグズスタンの言論」(一五九号)という新聞に、インド映画を「子ども時代の映画」であり「明るい色で描いたきれいな想いである」と評した記事が掲載されている。今から振り返るとすべてが混沌と混乱のなかにあると思えた時代、だからこそインド映画はあれほどクルグズ人に愛されていたのかもしれない。

インドネシアのインド映画

小池 誠
(こいけ まこと)

桃山学院大学教授

インドネシアでは、ハリウッド映画の人氣が国産映画を凌駕している。ハリウッド映画に次ぐ人氣を占める輸入映画は香港映画であるが、インド映画もインドネシア社会で無視できない存在である。一九三〇年代にはすでにインド映画が輸入され、一九五〇年代にはインド映画は一般庶民を対象とした「二級・三級」の映画館をほぼ独占するようになった。映画製作者が国産映画に対する脅威として、輸入制限を政府に強く求めるほどの人氣であつた。インドネシアでインド映画が人氣を獲得した理由のひとつとして映画挿入歌の魅力がよく挙げられる。

一九九〇年代になってシネコン型映画館が増える、それまでインド映画が上映されていたような映画館の数は減って、インド映画の上映の機会が極端に少なくなつた。首都ジャカルタのパサル・スネン(月曜日)という下町にあつたりボリは、インド映画ファンには有名な映画館であつたが、一九九〇年代に入つて観客が減少するようになり廃業に追い込まれている。シャルク・カーン主演の「Kuch Kuch Hota Hai」(1998)のように単発的に大ヒットして

多くの観客を集める話題作が出るが、インド映画がつねに上映される映画館は今はない。

映画館ではインド映画の影が薄くなっているが、その代わりに、ほぼ毎日どこかの放送局でインド映画が放映されている。韓国ドラマや南米制作のテレビノベラ(メロドラマ)と並んで、インド映画はインドネシアの民放テレビに欠かせないグローバルなソフトになつている。昼間の時間帯にインドのB級映画が放送されたり、また、ときどきブライム・タイムに大作が放送され、高い視聴率を獲得している。また、海賊版も含めビデオ(VCD)とDVDというかたちでインド映画は流通している。一方、活字メディアでは、「ボリウッドと女性」というインド映画専門の週刊タブロイド紙が発行されているし、「ピンタン(スター)」という週刊テレビガイドにもボリウッドの人氣スターのゴシップが掲載されている。インド映画が好きなインドネシア人は、けっこう多いのである。



インド映画専門のタブロイド紙「ボリウッドと女性」

南太平洋随一の映画産業

村田 晶子
(むらた あきこ)

本館外来研究員

フィジーの映画産業の暴盤を作り、支えてきたのは、英領期にインドから労働移民として来島した人びとと、その子孫である。主要な町には歴史を感じさせる映画館があり、既にふたつのシネコンも営業し、ハリウッド映画もいち早く上映されている。インド系住民が経営するレンタル店も軒を並べ、週末とも



映画の音楽にのせて踊る女生徒

なると、インド映画の話題作を求めて、多くのインド系住民が訪れる。出身村を離れ、一人でインドから来島した父親について語ってくれた移民二世の男性に、「映画でインドを思い出していたのだから」という話を聞いたことがある。移民一世の母国インドへの思いに、フィジーの映画産業の出発点があるのだ。

現在では、移民三世から四世が中心となり、そのほとんどはインドの地を踏んだこともない人びとである。そんな彼らにとつてのインド映画とは、祖先の地を想像する道具のひとつに他ならない。同時に映画のなかで展開される、自らが生まれ、生活を営むフィジーとは異なるさまざまな光景に、ときに、インドの良さを垣間見、ときに、フィジーの良さを再確認する道具でもある。インド系住民にとつてのインド映画とは、彼らとインド、そしてフィジーを結び、じつに不思議な媒体と言えるだろう。

一方、フィジー系住民のお気に入りには、やはりハリウッド映画だ。しかし、彼らの多くも、インド映画の一般的な筋書きやダンスなどには妙に詳しい。

学校の催しで、インドの映画音楽にのせた女生徒の群舞を見ることがある。ある小学校で、級友から借りたインドの民族衣装を身にまとい、ぎこちなくも懸命に踊るフィジー系生徒がいたことを覚えていた。校庭中に響きわたるインド音楽にのせ、南太平洋のぬけるような青空のもと、色とりどりの衣装を身に付けたフィジー系とインド系の女生徒によって披露される群舞は、まさに「フィジーのインド映画」のワンシーンであつた。

特集 インド映画

モノ グラフィ

陶磁器に刻印された
まなざしの交錯
— 特別展「アジアとヨーロッパ
の肖像」から

吉田 憲司(よしだけんじ)

本館文化資源研究センター



(AA) 松の下で藤を剥く3人の男性の図 皿
中国? 1736~1750年 青花磁器 (大英博物館所蔵)

今回の特別展「アジアとヨーロッパの肖像」は、アジアとヨーロッパのあいだで交わされたまなざしの絡まりあいを歴史的にたどろうという試みである。こうしたまなざしのやり取りを簡潔に俯瞰するうえで、格好の資料となるのが陶磁器である。

アジアとヨーロッパの直接の接触が始まった一六世紀当時、ヨーロッパにはまだ磁器生産の技術はなく、磁器については中国から輸入する以外にすべはなかった。インド航路の開拓は、中国からの陶磁器の大規模な輸入に道を開く。景德镇をはじめとする中国の窯で制作された磁器は、オランダ東インド会社の重要な交易品となった。まもなく、中国の王朝が明から清へと移る動乱期に入り、中国磁器の輸入が困難になると、オランダ東インド会社は日本にその代わりに役割を求めた。おりしも、日本では、豊臣秀吉によるいわゆる文禄・慶長の役(一五九二~一五九八年)の終結とともに朝鮮半島の陶工が渡来し、ようやく磁器生産が始まったばかりであった。一六四〇年ごろには酒井田柿右衛門の手ですでに赤絵の技法も確立されていた。こうして、大量の有田の磁器が近隣の伊万里の港から積み出され、ヨーロッパや東南アジアへ輸出されていくことになる。「伊万里焼」の名は、この積み出し港の名に

由来する。

一方、ヨーロッパでも、独自に磁器製作への試みがなされた。試行錯誤の末に、一七〇九年、ついにドイツのマイセンで磁器の製作技術が開発される。その技術はほとんど流出して、ヨーロッパ各地に伝わり、各所で磁器の生産が開始されていく。各国の王侯にとつて、独自の磁器工場をもつことが、いわばステータス・シンボルとなっていたのである。この



(AE) 犬と散歩する
ヨーロッパ人カップルの図 皿
中国 1715~1725年
清代 色絵磁器 (大英博物館所蔵)

うち、ブルボン家のコンテ公によって築かれたシャンティイ窯は、とくに日本の柿右衛門様式の写しの生産で知られる。一方、イギリスのチエルシー窯は、一七四五年に開窯し、一七八四年には閉窯するという短命の窯ではあったが、マイセンの模倣とともに、柿右衛門様式の写しや人形の製作で一時代を築い

た。ただし、十分なカオリンに恵まれなかつたイギリスでは、粘土にウシやヒツジの骨を焼いた灰を混ぜるといふポー・ン・チャイナの技法がポウ窯で開発され、その後のイギリスにおける陶磁器の大量生産を支えることとなった。この技法を取り入れたスタッフォードシャーのジヨサイア・スポードは、また、柳の木

や楼閣の図柄からなる中国の山水楼閣図をもとにした、いわゆる「ウェイロウ・パターン」をミントン社の創始者トーマス・ミントンから受け継ぎ、銅版転写の技法を用いて広く普及させたことでも知られる。このように、陶磁器をめぐるのは、アジアとヨーロ

ッパのあいだで、さらにはアジアとヨーロッパのそれぞれの内部で、製品、技術、絵柄のやり取りが、互いに複雑に絡まりあいながら展開されてきた。今回の展示では、そうした絡まりあいを解きほぐして点検できるように、東西の陶磁器や磁器人形を、アジアから見たヨーロッパ像を示すもの(AE)、アジアから見たアジア像を示すもの(AA)、ヨーロッパから見たヨーロッパ像を示すもの(EE)、ヨーロッパから見たアジア像を示すもの(EA)に整理して展覧している。器壁に描かれた絵柄や、磁器人形の姿かたちのなかに、アジアとヨーロッパのあいだで取り交わされたまなざしのやり取りがうかがえるはずである。



(EA) シノワズリの人物花鳥文カップ&ソーサー
景德镇窯で製作(1690~1710年)、イグナーツ・プライスラーによりポーランド、ウラツワフで絵付け(1720~1730年) 中国/ポーランド 磁器 彩色 (大英博物館所蔵)



(EE) 男女像 磁器人形
(おそらくヴィクトリア女王とアルバート王子)
スタッフォードシャーの窯
イギリス 1840~1850年 陶器
(ヴィクトリア&アルバート美術館所蔵)



(AE) 広東西洋商館図 壺
中国 1780~1790年ごろ
清代 磁器 粉彩 (大英博物館所蔵)

神奈川県立近代美術館 葉山館の5年間を振り返って — 展覧会業務の外で

糸山 昌夫 (もみやま まさお)

神奈川県立近代美術館企画課主任学芸員

地球 ミュージアム 紀行

神奈川県立近代美術館/日本

二〇〇三年に矢萩喜徳郎がデザインした神奈川県立近代美術館(以下、「近美」と記す)の口コは三つの四角形からできている。複数の意味が込められているが、まずは近美の三つの建物を示している。もともと古い建物は、一九五一年に建てられた坂倉準三設計の鎌倉館。日本の近代美術館の先駆けであるこの建物は、一九九九年に国際組織DOCOMOMOによって日本の優れた近代建築二〇選のひとつに選ばれている。次は、鎌倉館から建長寺に向かう上り坂の途中にある鎌倉別館。大高正人建築設計事務所設計で一九八四年に建てられた。そして、もっとも新しい建物が二〇〇三年三月竣工、一〇月に開館した葉山館であり、美術図書室と講堂という新しい機能が近美に加えられた。

現在、近美には「学芸課」はない。二〇〇三年の葉山館整備とともに、それまでの学芸課が企画課と普及課にわかれた。展覧会の企画・実施に関して、各課に所属する学芸員の職務に差はない。ただそれに加えて、企画課は主として所蔵品の管理をおこなない、普及課は主として普及・広報活動をおこなっている。葉山館整備を機に保存・修復の専門家が採用され、近美の作品収蔵環境は、見違えるように変わった。年に何度が、学芸員がそろって収蔵庫や野外彫刻の清掃をする様子は、かつては「梁山泊」と言われた「鎌近」のイメージとはかけ離れているかもしれない。企画課には作品や写真の登録や貸し出し手続きを担当する非常勤職員もいて、そのお陰で学芸員は展覧会業務に集中できると言える。そして、葉山館整備のなかで構築された収蔵品管理システムをベースに、これら非常勤職員や、やはり葉山開館後に制度化したインターンの力も借りて、一五年ぶりに、その間の新収蔵作品四五九一点を収めた収蔵品目録を刊行することができた。

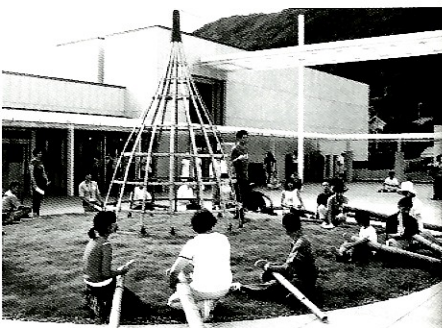
普及課の創設そのものが、今日の美術館・博物館に對

発見することができる、文字通りの「宝箱」になつてい
る。葉山館整備とともにホームページも拡充して、電子
媒体による広報活動の比重もますます増えてきたが、一
方で、二〇数年ぶりに復刊された美術館たより「たいせ
つな風景」も、毎月「風や雲」といったテーマを立てた
エッセイ集として、また別のコミュニケーションのあり
方を探り続けている。

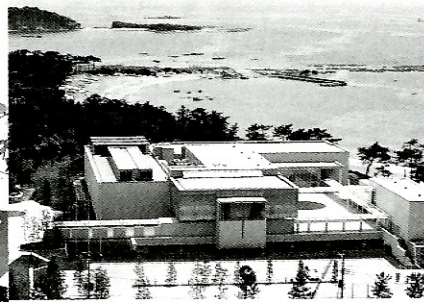
近美は今も、鎌倉館、鎌倉別館、葉山館の三館合わせて
年間一四企画前後と、以前にも増して積極的な展覧会活
動を展開している。しかし、葉山館開館後の五年間に起

きた変化は、これまで述べたように展覧会事業の外でこ
そ顕著であるように思われる。そして、今回開催する、
ASEMUS国際共同巡回展「アジアとヨーロッパの肖像」
も、展覧会事業を外に開くという、こうした志向の、もう
ひとつの可能性を探るものにはかならない。もともと
このような印象は立場や経験によって大きく左右され
るから、これは私的な感想とお断りさせていただく。

(特別展「アジアとヨーロッパの肖像」は、二〇〇九年二
月七日から三月二九日まで、神奈川県立近代美術館・葉
山館で開催)



ワークショップ
「きょうの はやまに みみをすます」



葉山一色海岸に臨む葉山館

「Museum Box宝箱」

する社会の要求を良くあらわしている。教育普及を専門
とする職員が中心になって、ワークショップなど体験型
の教育プログラムが数多く組まれるようになった。その
積み重ねの結果のひとつであり、発信型の美術館を目指
す手段のひとつが、「Museum Box宝箱」である。それ
には五六枚の収蔵作品カードと近美の日常を双六にし
たゲームが入っていて、小学生から大人までが、近美の
作品や展覧会の企画・実施に係わるよりリアルな情報を



The Museum of
Modern Art,
Kamakura &
Hayama

神奈川県立近代美術館

神奈川県立近代美術館の口コ

ラバーリーの花婿用袋

袋(標本番号H238243、高さ/45cm 幅/26cm)

上羽 陽子(うえば ようこ)

本館文化資源研究センター

この袋は、インド西部のグジャラート州カッチ地方で、ラクダやヤギなどの牧畜を業とするラバーリーの人のひとによって作られたものである。ラバーリーの女性たちはさまざまななかたちのガラスミラーを縫い付ける技法で、衣裳や調度品などを作っている。この袋に表現されている文様は、豊穡を意味するマンゴーの木である。色とりどりの刺繍糸を用いて、丸形、菱形、涙形、長方形といったさまざまなかたちに削って整えたガラスミラーが縫い付けられている。よく見てみるとひとつのガラスミラーを付ける刺繍糸が途中で他の色糸に変えられており、巧みに考え抜かれた色彩構成で文様が表現されていることがわかる。また、袋の両端には、ピースと糸を束ねた房が丁寧に縫い付けられている。

このようにして作られた袋は、花婿によって使用される。花婿は、結婚儀礼の前に、

親戚や近所の招待客へピンロウジを配る。ピンロウジはスバリと現地ではばれる、ヤ



シ科のピンロウの種子で、キンマの葉、石灰と一緒に嚙む嗜好品である。このピンロウ

ジは、結婚などあらたな人間関係や社会的な契約の成立の際に交換される。この袋は結婚儀礼のとき、花婿がそのピンロウジを入れておくものである。

結婚儀礼の最中、花婿はこの袋を介添人に預ける。袋を預けられたということは、花婿にとつてもつとも心を許せる人ということになる。

インド西部には現在でも、このような女性たちの手仕事に継承されている。この袋は、昨年収集されたインド西部の刺繍布三六〇点のうち的一点である。今秋から春まで開催される企画展「インド刺繍布のきらめきーパシン・コレクション」に見る手仕事の「世界」のなかで、約一〇〇点の刺繍布とともに披露目される。ぜひ、この袋を間近で見て、インド西部の女性たちの手仕事の世界を感じて欲しい。





サイクロンから見たミャンマー

田村 克己 (たむら かつみ)

本館民族社会研究部

天災よりも人災

今年五月、ビルマ(現国名ミャンマー)に、大型サイクロンのナルギスが大きな被害をもたらした。長くこの国につきあつてきたわたしは、現地のさまざまの知り合いのことを思うとともに、大いに驚かされた。その理由は、ビルマの人びとがこの国を大きな災害のない国といつてきたように、実際にそうしたことにはこれまでほとんど出会わなかったからである。初めて訪れたときの数年前、一九七五年に地震があつて、バガン遺跡が被害を受けたことを思い出すくらいである。

この国にとつて災害といえは、天災よりも人災の方が深刻かもしれない。一九六〇年代初めの調査に基づく民族誌によれば、政府は地震や洪水とともに、人びとにとつて五つの敵のひとつであるという。当時は軍が政権をとる前であつたから、政権それぞれ性格によつてではなく、人びとが政治権力に対し、伝統的にとつてきた距離と態度からこうした語りが出てきたのであろう。

わたし自身も調査地で、ともすれば恣意的な権力の行使と、敬遠してそれに近づかない人びとの態度を見聞した。わたしのフールドの村は、イラワジ川中流の氾濫原に位置しており、水が引くとともに順々に土地を耕して作物を栽培する。ところが、ある年に、退いていく水をせき止める堤が

築かれ、氾濫原の一部が貯水池のようになっていた。村人によると、政府の命令でこの堤を築かれたとのことである。村人は、従来通り耕作ができなくなつて困つたと言うが、他方で、あきらめに似た表情を浮かべるだけであつた。しかし翌年訪れてまた驚かされた。堤があとかたもなくなり、従来のように氾濫原が広がつていたのではないか。聞けば例年の雨季の洪水によつて堤が流されたといひ、そこにはこれまでと変わらずに平然と農作業にいそむ人びとの姿が見られた。

人びとの絆による復興

今回のサイクロンの報に接し、ビルマにかかわつてきた者の多くの戸惑いは、どのように人びとに救援を届けるかであつた。その背景には、さきに述べたような政府と人びとの関係がある。実際に、現政府の救援対策に対しての不信や不満がその後しばしば報道されている。他方でビルマの一般の人びとが政府の手を借りることなく、自分たちの力で被災地への支援をおこなつていることを現地の知り合いから幾度か聞くことがあつた。国連とASEAN(東南アジア諸国連合)とミャンマー政府による被災状況の報告書が公表されるにあつて、シンガポールの外相は現地の人びとの一致協力と団結を特にとりあげて述べた。

今回のサイクロンの災害については、これからの過程を十分に見極めていかねばならないのはもちろんであるが、どうも今のところ、復興をもたらすのは、人びととの疎遠な関係にある政府ではなく、伝統的な人と人との結びつきのようなのである。



平然と農作業にいそむ

時	論
新	論
理	想 論

刺繍布に込められた思い

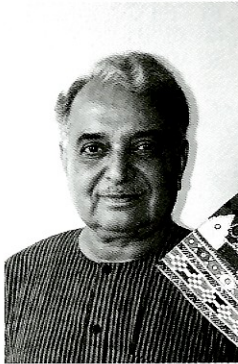
中谷 純江 (なかたに すみえ)

大阪大学非常勤講師 本館外来研究員

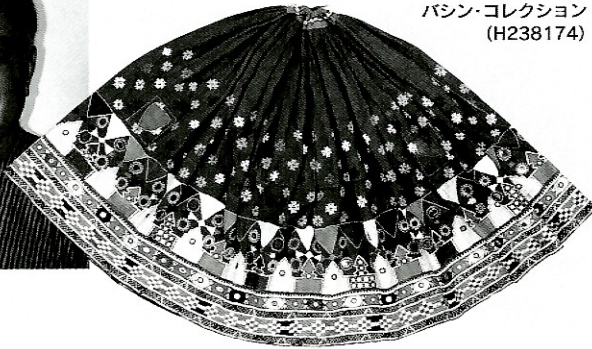
手工芸開発に貢献

今年一〇月九日から、民博で「インド刺繍布のきらめき」という企画展を開催することになった。展示されるのは、おもにインド西部グジャラート州のもので、B・B・バシンという人物から民博が入手したものである。バシン氏は、インドで三〇年以上も手工芸開発に携わってきた経歴をもつ。長年の仕事をとおして、たくさん

B.B.バシン氏 NGOパルサナ代表
(金谷美和撮影)



女性用スカート
バシン・コレクション
(H238174)



品と出会い、そこからコレクションが生まれた。

コレクションを始めた一九七〇年代、彼は警察官僚としてグジャラート州知事の補佐官を務めていた。早晩後のカツチ地方の困窮状態を視察する旅の途中で、女や子どもが身につけている刺繍のあまりの美しさとその多様性に驚いた。そして、彼女たちが貧しさをゆえに二重三文で刺繍を手放している現状に心を痛め、なんとかカツチの人びとが刺繍の技術によって生活する方法はないものかと、上司に直訴したそうだ。彼の情熱や能力を知る上司の尽力によって、行政官へと転身、手工芸開発に携わるポストをえた。その後、グジャラート州政府と中央政府の両方において、手工芸開発にかかわる重要なポストを歴任し、現在は自らNGOパルサナを組織している。

刺繍布の「声」を展示

初めて彼のコレクションを見たとき、ミラーワークの刺繍がきらめくたびに、ひとつひとつの布が生き生きとした表情で、何かを語りかけているような感じがした。バシン氏は箱のなかから刺繍布を次々に取りだしながら、「ほら、この鳥のかたち、様式化されたデザインを見てもらい」このピース、これまで見たものに、こんなに光るものは他になかったよ」「こ

のブラウスは、わたしの娘に職人さんがプレゼントしてくれたものだよ」などと話してくれた。最初は、ただ布がもつ魅力に圧倒されているだけのわたしだったが、彼がいつ、どのようにして、ひとつひとつの刺繍布を手に入れたのかを聞き、また、彼がこれまでに取り組んできた手工芸開発の仕事について深く知るようになるにつれて、このコレクションには刺繍布自体がもつ美や技のすばらしさ以外に、もうひとつ別の価値が隠されていることに、気がついた。

生活に困って生きてゆくために、大事な刺繍布を手はなした女たちの切ない思い、社会が近代化し、経済が市場化していくなかで、手仕事の技が忘れられ、生きる場を失った職人たちの失望、そうした現状に対して、伝統技術をもつ人たちが生活できる社会を作ろうとした人たちの熱意が、ひとつひとつの刺繍布に込められていたのである。

刺繍布が語るこれらの「声」を、かたちにして展示するという難題に、企画展実行委員のメンバーは挑戦した。バシン氏が愛した一枚一枚の刺繍布の魅力、その美しさや技術をきちんと伝えること、そして刺繍布が収集された社会背景や伝統技術を守ろうとする人びとの思いを知ってもらうこと、このふたつの願いを今度、はわたしたちが刺繍布に込めて、展示したいと思っている。

カイサ設立時から働く

アハメド・アカールさんに初めて会ってもう五年ちかくなる。当時、ヘルシンキ市の多文化交流センター・カイサで文化事業担当の職員をしていた彼は、多文化主義と公平性を行政指針とするヘルシンキ市が施設の長に外国人を採用しないことを嘆いていたのを思い出す。今回アカールさんに会った目的は、昨年カイサの所長に着任した彼にそのいきさつを直接聞くことだった。

チュニジア出身のアカールさんがフィンランドに来たのは一八年前、難民や労働移民が大量にヨーロッパに流入していたころである。しかし、彼の場合はそのいずれでもなく、当時留学していたパリで知り合った今の奥さんになる女性についてきたのがきっかけであった。一九八〇年代末のフィンランドはフランスなどに比べ、まだまだ町の景観に外国人の存在を感じさせるものは少なく、社会全体が文化的モノトーンによって支配されていた。人びとの刺すような視線も気にならなかった。フィンランド語はわからなかったが、あるときバスのなかで投げかけられたことばが、外国人への軽蔑のことばであったことは理解できた。そんな国に残ることになったのは自分でも不思議だが、その言語には興味があったという。以来彼はフィンランド語の習得に全力を

尽くし、短期間で習得した。

おりしもフィンランドは外国人の急増に対処するためさまざまな法や行政上の整備をおこなっており、自治体も彼らを住民として受け入れる具体的な施策に迫られていた。外国人のほぼ五割が居住するヘルシンキが、外国人との多文化交流をめざして一九九六年設立したのが多文化交流センター・カイサであった。母語のアラビア語にくわえ、英仏語の他、いくつものヨーロッパのことばが話せるアカールさんは臨時職員に採用された。こうして彼はカイサ設立時からその成長に付き合うことになった。自分ほどカイサを知る人はほかにいないという所以である。

社会の構成員として

カイサの代表的な活動で彼が深くかわつてきたものは少なくない。そのひとつが、恒例となった移民の歌謡コンテストであるアワヴィジョンである。これは一五〇人ほどの参加者が春の決勝大会に至るまで勝ち抜いていくコンテストで、最終の決勝大会は一五〇人ももの観客を集める大規模行事となっている。興業としても成功するほか、マスコミにも注目されプロ歌手も出るようになった。もうひとつは外国人のための多言語情報サービスであるインフォバンクである。これはフィンランドにすむ外国人にかかわるあらゆる生活情

報をインターネットで一五もの言語により提供するもので、カイサが長年にわたりにコンテンツやシステムを整備してきた。その公益性と汎用性のため来年度からは政府の直接資金援助による機関に格上げされる可能性もあるという。昨年アカールさんの所長への任命は公募による結果であったが、外国出身者として行政施設長へ登用された初めてのケースであった。

しかし、彼の目標はカイサでの派手なイベント活動や情報提供だけではない。むしろ外国人コミュニティの文化活動支援を通じて社会での居場所を確保すること、社会の構成員として自他ともに認められるようにすることにありたい。そして、いまだに残る多数派の自己中心的な意識を変えること。なかでも彼がもっとも改めたいのは、外国人は社会のお荷物だ、自分たちの築いてきた繁栄を食い物にしている、という先入観、そして外国人への不信である。

ある新聞記事のタイトルに「宝くじにあつたのはどっち？」にあつたのはわたしたちを受け入れたフィンランド」という彼のことは引用された。これは、フィンランド人がしばしば言う陰口「フィンランドに受け入れられた外国人は宝くじにあつたようなもの」を逆手にとったものである。実際難民のなかにも高度な教育や技術をもつものがあるにもかかわらず、ほとんどは活用されず、生活援助で狭い世界に閉じこもり

外国人として生きる

「宝くじにあつたのはどっち？」

庄司 博史 (しょうじひろし)

本館民族社会研究部

暮らすことを余儀なくされている。一方で、社会が居ながらにして、さまざまな文化やことばに触れ、世界と向き合えるきっかけを外国人が提供しているという現実ほとんど無視されているというのである。

一方で彼は、外国人の社会への甘えに対しても厳しい意見をもっている。社会適応の困難や偏見はあると

しても、少なくとも協調性とフィンランド語の習得への努力は義務であるという。アカールさんはカイサの所長という立場をこえ、メディアや各種集会で以上のような主張を積極的に発言してきた。

移民二世に希望を託す

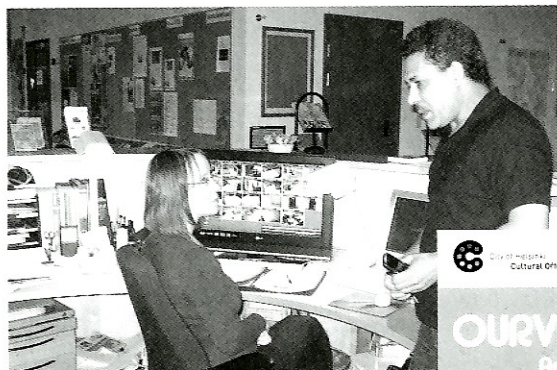
とはいえアカールさんの将来への展望

は暗いものではない。フィンランドは世界に誇れる多文化主義に基づく移民統合法、平等法をもち、それを政策で行使しつつある。今の子どもたちは移民も多数派もこの理念の下に当たり前のように混じり合っている。移民の子どもはフィンランド語も多文化多言語にふれながら教育を受けている。移民の子どもはフィンランド語もほぼ完全に習得し、多数派と同じ可能性をもつと信じて育っている。将来彼らは社会の

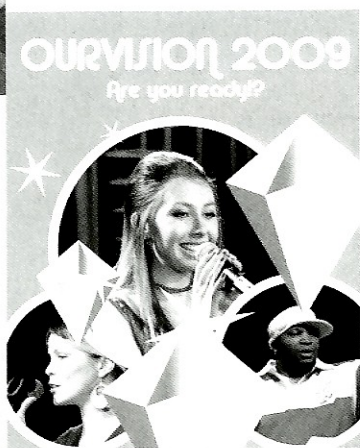
さまざまな分野に進出し影響をおよぼすことのできる人びとに育っていくことに期待できるというのである。ところで会話のなかで、アカールさんが「いずれ、ここでも移民出身の国会議員がうまれるに違いない」といったことが気がになった。わたしには、それが自分の決意を言ったように思えてならないのである。



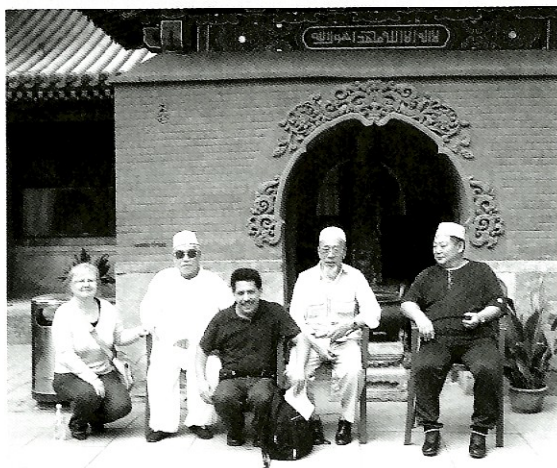
今年春のアワヴィジョンのパネル展示の前で。コンテストには日本人(パネル右)や中国人(左)も参加したという



カイサのスタッフと相談するアカールさん。スタッフには外国人も多く常勤採用されている



来年のアワヴィジョン(OURVISION)参加者募集のちらし。名称はヨーロッパで人気のあるソングコンテストヨーロッパヴィジョンにヒントをえたという



個人的には中国の文化のファンであるアカールさんはしばしば中国をおとずれる。回教モスクのまえで、左端は奥さん

歳時 世相篇

⑦ 【ハリ・ラヤ】

オラン・アスリの祝祭日

信田 敏宏 (のぶたとしひろ)

本館研究戦略センター

わたしが調査を続けているマレーシアの先住民オラン・アスリの村では、毎年、一〇月の初旬に、「ハリ・ラヤ」とよばれる行事がおこなわれる。ハリはマレー語で「三」、ラヤには「大きな二視座」などの意味がある。

スラマツト・ハリ・ラヤ!

ハリ・ラヤの一日を簡単に描写してみよう。ハリ・ラヤ当日、村びとは日々の仕事を休んで、朝から、牛肉や鶏肉のカレールマンとよばれる「ちまき」二竹の筒のなかにもち米、ココナツミルク、少量の塩を入れて炊いたものを作る。

料理の準備が一通り終わると、前日に掃除をしてきれいに片づけた客間(その日だけ客間になる部屋)に、カレーなどの料理やルマン、お菓子、そしてジュースなどの飲み物を並べて、客人が来るのを待つ。

当初のハリ・ラヤでは、会館に村びとがつと、共食していたが、今では家々から老人まで、村びとは着飾って近しい親族の家を訪問し、おいしい料理をご馳走になり、その家の人たちや訪問客とおしゃべりをしてひとときを過ごす。訪問する際には、「スラマツト・ハリ・ラヤ!」(ハリ・ラヤ、おめでとう!)と主人に言っ

て握手を交わし、「さあ、どうぞ、食べてください」という主人のことは合図に、料理を食べる。その後は、手作りクッキーなどを食べ、ジュースや甘いミルクティー、コーヒーを飲む。そうして、二、三軒ほどの家を訪問すると、普通はお腹がいっぱいになるが、子どもたちや若者たちは、いくらでも食べられるので、喜んで何軒も家々を訪問する。こうして、午前中から繰り返しながら、夕方まで続く。

日が暮れると、村の若者たちが演奏する生バンドに合わせて野外ディスコが開かれる。大音量のロック調のリズムに合わせて、子どもたちや若者たち、そして

文化を模倣する

マレーシアでハリ・ラヤと言えば、普通はイスラームの断食月明けの大祭(ハリ・ラヤ・プアサ)を意味している。ハリ・ラヤ・プアサでは、首相官邸も一般に開放され、

おおぜいの人びとがお祝いに訪れる。訪問者には、料理やお菓子、飲み物などが振舞われるが、イスラームの戒律に従ってアルコールは厳禁である。こうしたハリ・ラヤ・プアサの祝祭は、首相の家ばかりでなく、

マレー農村の家々でも断食月明けにおこなわれる。イスラームはいわゆる太陽暦を採用しているので、毎年ハリ・ラヤ・プアサは、太陽暦を基準にすると、一日ほど早く来ることになる。



調査村のハリ・ラヤの一場面。子どもたちも着飾っている(2003年10月)

オラン・アスリは、このマレー人のハリ・ラヤ・プアサを模した祝祭をおこなっていることになるのだが、マレー人のハリ・ラヤとオラン・アスリのそれとは意味が大きく異なる。オラン・アスリの場合には、そこに宗教的な意味は付されていない。わかりやすく言えば、クリスマスチャンではない日本人がクリスマスを楽しむような感じである。

オラン・アスリ社会でも、イスラームへ改宗したオラン・アスリの人びとは、マレー人のハリ・ラヤに合わせて、祝祭をおこなっている。一方、キリスト教へ改宗したオラン・アスリはクリスマスに、また、華人との付き合いが深いオラン・アスリは、華人の旧正月(春節)に、それぞれ合わせている。いわゆる正月(太陽暦)にハリ・ラヤをおこなう村もある。その結果、年末から年始、一月、二月にかけて、オラン・アスリの村では、あちこちで週末毎にハリ・ラヤがおこなわれることになる。いずれも、ハリ・ラヤの方法はほぼ同じであるが、オラン・アスリの場合には、ビールなどのアルコールも給されるのが特徴であろうか。

親族がつと一日

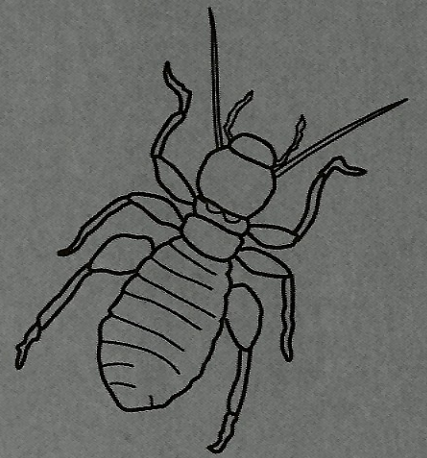
わたしの調査村では、以上のようなオラン・アスリ社会が他文化を模倣する状況を改善し、村の独自性を主張するため

に、十数年前から毎年一〇月一日にハリ・ラヤをおこなうことにした。他村の人にもわかりやすいように「ハリ・ラヤ」と村の人びとはよんでいるが、正式名称は「ハリ・クスダラン」である。ハリ・クスダランには「むかしの苦しかった日々を思い起こす日」という意味が込められている。この名称には、模倣ではない新しい伝統を創造しているのだという彼らの自負が見え隠れしている。最近では、休暇が取りやすいように、一〇月の第一週の週末にハリ・クスダランを実施している。そのときには、都市で働いている若者たちも、休暇を取って、バスなどを乗り継いで、村に帰ってくる。以前は、知人や職場の人たちには休暇の理由が理解されにくかったが、十数年も続いた今では伝統行事として定着してきているようだ。

夜の野外ディスコには、あちこちの村からおおぜいの人びとがやってくる。この日はかりは、ゆっくり眠ることはできないが、村びとはみな毎年この日が来るのを楽しみにしているのだ。

わたしもハリ・クスダランや他村でのハリ・ラヤを何度か経験した。最初は食べ過ぎたり、会話もきこちなかったが、次第に慣れて、誘われるままに次々に多くの家々を訪れることができるようになってきた。夜の野外ディスコでは、「上を向いて歩こう」をアカペラで歌ったこともある。残念ながら、恋は芽生えなかったが。

生きもの
博物誌
【チャタテムシ】



博物館の
いたずら虫たち④

河村 友佳子
(かわむら ゆかこ)

(財)元興寺文化財研究所研究補佐員

えに、資料がある場所を清潔に保つことや、資料を安全に維持できるように温度と湿度を管理することが博物館において重要な活動のひとつになってくる。

環境整備のための日常的な取り組み

民博では、資料が置かれている場所を清潔に保つための取り組みの一環として、チャタテムシを確認したときは、その食性に鑑み、周辺にカビが生えていないか、または、ホコリやゴミが溜まり、カビが発生しやすい環境になっていないかを確認することを徹底している。そして、掃除をおこなうことで、薬剤などになるべく頼ることなくチャタテムシが生息しにくい環境を整えるように努めている。

その他にも、日常的な取り組みとして、資料を保管する場所である収蔵庫に職員が入るときは、専用のスリッパか作業靴に履き替え、外部からホコリやゴミをもち込まないようにしている(写真1)。これは、屋内に入る際に靴を脱ぐという習慣をもつ日本では、特別なことに感じられないが、清浄な環境を保つには非常に効果的である。この他、複数ある収蔵庫のうち、少なくとも一カ月に一収蔵庫を目標に順次掃除をおこなっている(写真2)。これと合わせて資料にカビや虫の被害がないかを目視で点検している(写真3)。

温度と湿度を管理することについては、空調機によって、資料の材質や季節に応じて設定した温度と湿度を保つとともに、自記温湿度計やデータロガー(写真4)で、資料がある場所の温度と湿度を記録し、設定した温度・湿度が守られているかを定期的に確認している。この結果は、資料管理の担当者や、資料保存担当教

名前の由来は、茶を立てる音

チャタテムシとはあまり聞きなれない名前であろうか。しかし、チャタテムシは世界に広く分布する昆虫である。この仲間には、野外の樹幹、落ち葉、岩の表面など湿度の高い場所で生活し、カビや地衣類を食べるものと、屋内で生活するものがある。後者は、一般住宅にも生息しており、その名前の由来はチャタテムシの一種であるスカシチャタテが障子にとまって発する音が、茶せんでお茶を立てる音に似て聞こえるためであるといわれている。屋内で生活するチャタテムシの仲間は、障子紙や、書籍、貯蔵食品などを食べる。

博物館では、カツブシチャタテ、ヒラタチャタテ、ウスグロチャタテ、ソウメンチャタテ、コチャタテなどが、動植物標本資料、図書資料を食害する文化財害虫としてあげられる。なかでも図書資料の糊付け部分など、糊のついた紙を好み、そこに発生したカビも食べる。しかし、これらはいずれも0.7から2ミリメートル程度の小さな昆虫であるため、資料への加害はそれほど大きくない。チャタテムシは、多湿な環境を好むことから、それが確認された場所は湿度が高いことを知らせる、いわば「高湿度指標虫」となる虫である。また、チャタテムシが発生したということは、付近にエサとなるカビが生えている可能性が高いことを示している。このような環境は、当然、資料にとって好ましいものではない。ゆ

員、空調管理をおこなう関係者が共有し、もしも問題が起こった場合は、これらの関係者が協力して原因の解明と問題の早期解決を図るのである。

民博では、このように、資料に接する博物館職員が日常業務でおこなえる範囲の活動を積み重ね、衛生面に配慮するとともに、温度・湿度環境を整える

ことで、総合的に虫の発生を防ぎ、人間にも快適であり、資料にも安全な環境を実現できるように努力している。



(写真1) スリッパ、作業靴への履き替え



(写真2) 1ヵ月毎におこなう収蔵庫清掃の様子



(写真3) 資料の目視点検



(写真4) 収蔵庫に設置した自記温湿度計とデータロガー

チャタテムシ目 (学名: Psocoptera)

卵から孵化した幼虫が、さなぎの期間を経ずに成虫になる不完全変態の昆虫。この仲間は、体長1～10mmと小型で柔らかい体である。特に熱帯地方に多くの種類が分布しており、世界で約3000種類、日本では92種類が確認されている。文化財害虫となる種はコチャタテ科とコナチャタテ科に属しており、なかでも注意すべき種はコナチャタテ科に属する。コナチャタテ科のチャタテムシは体長が0.7～2mmで、翅を欠く。体の色は種類によって、褐色、暗褐色、赤褐色、汚灰色、淡黄色などさまざまである。



チャタテムシ類 無翅虫
(提供:イカリ消毒株式会社)



更紗産地が移転した 本当の理由

金谷 美和 (かねたに みわ)

本館外来研究員

震災後、村が移転する

わたしは、この一〇年来、豊かな染織の伝統をもつインド西部グジャラート州カッチ地方で、染色を生業とする職能集団の調査をしている。わたしが、更紗産地であるダマルカー村を調査するようになったのは、二〇〇一年に起きたインド西部地震がきっかけである。村は、震源地に近かったため、家屋のほとんどが倒壊し、約二〇〇〇人の人口のうち七〇数名の死者を出すという大きな被害をうけた。わたし自身は、援助金をダマルカー村に送る手伝いをしたことから、この村

の復興について調査をすることになった。

染色業者たちは、震災から一カ月後に染色業組合を作り、資金をとりまとめて土地を購入し、新しい村、アジュラクプール村の建設にとりかかった。そして政府やNGOと交渉し、復興開発援助をうけて、アジュラクプール村に家屋や工房などを建ててもらった。住民がダマルカー村を去ることになった理由は、染色用水の水質が変化し、染色に適さなくなったというものであった。

ダマルカー村からアジュラクプール村への移住は順調におこなわれたが、震災から五年を経たころから移住はすまな

くなくなった。アジュラクプール村には二軒の工房が移転したものの、ダマルカー村には依然として五一軒の工房がとどまり稼働している。水が染色に適さないのなら、仕事が続けられないはずなのに、なぜ移転はすまないのか、本当に水質は悪化しているのだろうか、という疑問がフィールドワークのさなかに浮かんできた。

水環境の変化

ダマルカー村では、染色した布を洗うために、井戸水を用いている。井戸水の化学成分を調べ、また井戸の所有と水利の形態と歴史について調べた。そこでわかったことは、意外なことであった。確かに水質は変化しているが、それは地震のせいではなく、地震以前から進行している、地下水の水位低下が原因であることがわかったのである。

この村では、地下水を染色に用いるようになったのは、一九九〇年中ごろからである。それまで村には川があり、その水を染色に用いていた。カッチ地方は、年間平均降水量が三〇〇から四〇〇ミリ

メートルしかなく、半乾燥気候、あるいは乾燥気候に属している。雨期に地面に染み込んだ水が地中にたまり、それが地表に数キロメートルのあいだ表出していた。その川が干上がってしまった、染色に用いる水がえられなくなると、染色業者は農民から土地を買取って、その土地に井戸を掘削するようになった。水位が低下するにつれて、人びとは井戸を深く掘り、それが水質悪化を引き起こしていると考えられる。

それだけではない。水の減少は、水の個人所有を生み出した。川の水を用いていたときには、染色用の水は共有資源であったが、各自が井戸を掘るようになると、水は個人所有の資源となった。井戸を所有するには、土地を購入し、井戸を掘削するだけでなく、揚水するためのモーターと、それを動かすためのガソリンや電気が必要である。井戸をもたない人びとは、井戸の所有者に料金を払って、水を使用している。水は、金のかかる資源になったのである。井戸の所有者は、投資してえた水を枯れるまで使い切りたいと考え、そのためアジュラクプール村への移住がすまないのである。

しかし明るい展望もある。アジュラクプール村では、水を組合の共有資源にして、個人で水を所有することを避けようという試みがなされている。地震は災厄

であったが、復興援助金をえたおかげで、伝統染色の産地としての危機を脱することができたともいえる。

問いはフィールドから生まれる

人びとが、移住の理由を水質変化だと言ったのは、わたしに嘘をついたわけではない。なぜなら、地震直後に水質が劇

的に変化した井戸があったからである。また、震災被害の調査に来ている外国人に対して、震災の被害であることを強調して、援助に結びつけたいという期待もあっただろう。しかし、地震の被災地には地震の被害があるものだという抜きがたい先入観がわたし自身にあったことが、村の移転の理由を見誤らせた最大の理由であろう。当初のフィールドノートを読み直すと、地震の前から地下水が減少し

ているのだ、と語ってくれた村人についてわたしはしっかりと記録していた。しかし、わたしの先入観は、その貴重な語りをデータとして取り上げなかったのである。

フィールドの人類学者は万能ではない。今回のように、先入観が調査の目を曇らせることもある。しかし、調査の最中に生じた、「なぜ移転はすまないのか」という問いを大事にし、その問いをもとに



井戸水をタンクに溜めて染色前に生地を洗う。2006年9月、ダマルカー村



更紗の染め上がりを確認する親方。2007年2月、ダマルカー村



井戸を掘削する。2007年11月、ダマルカー村

■時 間:14:30~15:30(予定)

(常設展示場および特別展示場観覧料が必要です。)

国立民族学博物館(みんなく)の研究者が来館された皆様の前に登場します!

「研究について」「調査している地域(国)の最新情報」「展示資料について」などなど、話題や内容は千差万別! どんどん質問もおよせください。展示場でお待ちしております。



展示ケースでの湿度コントロール (イントロダクション展示)

10月5日(日)

三田 牧 (先端人類科学研究部機関研究員)

沖縄の魚にみる生活文化

於:展示場内休憩所

10月12日(日)

飯田 卓 (文化資源研究センター准教授)

貝の民族学

於:オセアニア展示、アフリカ展示、北アジア展示

10月19日(日)

松園 万亀雄 (国立民族学博物館館長)

「フィールド・ワークってなに? ー私のアフリカ体験から」

於:第5セミナー室

10月26日(日)

園田 直子 (文化資源研究センター教授)

展示場の環境づくりー温度・湿度編ー

於:常設展示場、特別展示場

編集後記

マンガやアニメが日本の「文化大使」ならば、映画は長らくインドの文化大使となってきた。派手な衣装に身をつつむグラマラスな俳優や女優が繰り広げる「濃い」物語が、世界に広がるインド・イメージの重要な要素であることは間違いない。今号ではそのインド映画を特集した。インド系移民の拡散地域にそって伝わり、その先へと広がってゆくインド映画の活力には驚かされてしまう。今年は日印映画交流年にあたり大阪や東京などではインド映画祭も開催されるようだ。レンタルビデオ店でも特集でふれた作品のいくつかは借りられる。今号をきっかけにインド映画で秋の夜長を楽しまれるのも一興かもしれない。

今号では「裏特集」として、10月から民博で開催される企画展「インド刺繍布のきらめき」に関する話題をいくつか取り上げている。独特の色使いと美しい文様もまたインド・イメージの精華のひとつだ。外出には絶好の季節、民博に足を運び、刺繍の美と技を見、またそこに込められた人びとの情念を感じていただければ幸いである。(三尾 稔)



次号予告/11月号特集
今日のレヴィ=ストロース

2008年 10月号 第32巻第10号通巻第373号
2008年10月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話06-6876-2151

発行人 西尾哲夫

編集委員 久保正敏(編集長) 佐々木史郎
庄司博史 中牧弘允 三尾 稔
山中由里子

協力 財団法人 千里文化財団

制作 株式会社博報堂

製版・印刷 アサヒ精版印刷株式会社

●本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館企画連携係へ
●本誌掲載記事の無断転載を禁じます



交通案内

- 大阪・千里万博記念公園内
- 大阪モノレールで「公園東口駅」・「万博記念公園駅」下車徒歩約15分。
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車徒歩約15分(茨木方面から1時間1本程度、日本庭園前駐車場乗り入れのバスがあります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください)。
- 自家用車の場合は、万博記念公園「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。